

日本とインドネシアの互助慣行の比較

—東ジャワとバリ島を中心に—

流通経済大学 恩田守雄

1. 目的

本報告の目的は田植えなどの労力交換のユイ（互酬的行為）、道路補修などの共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理のモヤイ（再分配的行為）、冠婚葬祭のテツダイ（支援＜援助＞的行為）という日本の互助行為について(恩田,2006;Onda,2013)、インドネシアと比較し相違点と類似点を明らかにすることである。それは東南アジア的な互助ネットワークを考察することでもある。

2. 方法

上記の目的を達成するため日本とインドネシアの互助関連の文献を精読し、また現地調査を行った。調査地点は 2016 年 8 月に東ジャワのマドゥーラ島、シドアルジョ、マラン、また 2017 年 3 月にはバリ島のギャニャール、クルンクン、タバナンの農村や山村、漁村で地元住民への聞き取り（半構造化インタビュー）調査を実施した。なお東アジアの互助慣行は既に研究を行い（第 88 回日本社会学会報告「東アジアの互助慣行—日本と韓国、中国、台湾との比較—」）、本報告はその研究の延長上にあり東南アジアが対象である。

3. 結果

インドネシアの互助慣行は日本同様近代化の過程で衰退しつつあるが、村落ではまだ伝統的な互助行為が見られつながらや絆が健在である。特に親族関係という血縁の系譜だけでなく地縁関係を中心にした互助ネットワークが存続している。東ジャワでは共同作業でググル・グヌン(gugur gunung)やケルジャ・バクティ(kerja bakti)、冠婚葬祭の手助けではメンバンツウ(membantu)やメノロン(menolong)という言葉を使い、また日本の頼母子に相当するアリサン(arisan)がある。バリ島では日本のユイにあたるサリン・ツルンガン(saling tulungan)、冠婚葬祭の手助けで葬儀のメディロカン(medelokan)や婚儀のメアバン・アバン(meaban-aban)の言葉が使われ、小口金融では同様にアリサンもある。おおむね互酬、再分配、支援（援助）の3分類に分けて互助行為を捉えることができる。

4. 結論

東ジャワではゴトン・ロヨン(gotong royong)、バリ島ではサリン・ツルンガンやサリン・メトゥルガン(saling metulungan)という言葉が相互扶助として言われる。末端の行政単位として RT(Rukun Tetangga)と RW(Rukun Warga)があるが、日本の隣組の遺制とも言える RT が近隣互助組織をつくっている。なおイスラム教では制度的な義務喜捨のザカート(zakat)と自発的な任意喜捨のサダカ(sadaqah)、ヒンズー教では自由意志で寺院に寄付するプニア(punia)があり、これらは不特定多数の貧困者を対象にした互助行為と言える。日本のユイに相当する行為は機械化でほとんど見られないものの、生活の隅々まで浸透した宗教に基づく互助行為は強い。特にそれは多様な喜捨に表れている。また小口金融ではコーラン（クルアーン）が禁じていることもあるが利息がつかないアリサンは共済と親睦の目的でされている。アリサンをコーランを読むために行う地域もあり、東アジアの入札式の小口金融とは異なる。こうした現地調査の知見を踏まえ、東アジアとの比較も念頭に東南アジアに通底する互助慣行の構造を解明することが今後の課題である（科学研究費助成事業＜学術研究助成基金助成金＞：平成 27 年度～ 31 年度、基盤研究 C、研究課題「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」、課題番号 15K03860、研究代表者＜個人研究＞恩田守雄）。

＜参考文献＞

恩田守雄、2006『互助社会論』世界思想社。

Onda, Morio. 2013. 'Mutual help networks and social transformation in Japan,' *American Journal of Economics and Sociology*,71(3):531-564.